

追悼記

Dr. Walter H. Ehrenstein (1950 - 2009) を偲ぶ



学恩のこと、音楽のこと

濱田治良 (徳島大学)

Walter と私の友情は 1977 年 5 月 2 日付の一通の手紙から始まりました。それには 1976 年に Paris で開催された第 21 回国際心理学会での発表に関する彼からのコメントが記されていました。そのコメントは「明るさと輪郭線知覚に関する数理模型」を彼の父君が発見した Ehrenstein 錯視に適用できるかを尋ねたものでした。そこで友人と共同でコンピュータ・シミュレーションを試みました。しかし、興奮と抑制の拮抗過程を基本とした数理模型ではその錯視を模擬することはできませんでした。

一方、その当時、私は Craik-O'Brien 錯視の実験を始めていました。この錯視も興奮と拮抗型抑制を基本とした数理模型では模擬できず、非拮抗型抑制の過程を提案する必要がありました。そこでその成果を 1980 年に Leipzig で開催された第 22 回国際心理学会で発表しました。その学会に Walter も出席していて、彼と初めて会い楽しい有意義な一時を過ごしました。国際心理学会の終了後、京都工芸繊維大学の秋田宗平先生とご一緒し

て Freiburg の Prof. Spillmann の研究所に向かいました。すると偶然にも Walter は Konstanz 大学から Freiburg の研究所に移ってきていました。

徳島大学での私は Walter に英語の添削をしてもらい、非拮抗型抑制についての数編の論文を国際誌に公刊することができました。彼の添削が無かったら、そのようにスムーズには進まなかっただろうと思います。そして 1991 年に在外研究員として Dortmund 大学に 10 カ月滞在しました。Dortmund では Walter、そして Cavonius 先生と共同で明るさ対比の実験をし、非拮抗型抑制の存在を示唆するデータを得ることができ、その成果は 2008 年の *Gestalt Theory*, 30, 61-69 に共著論文として公刊されました。共同研究以外でもドイツでの生活で大変お世話になりました。特に思い出深いのは、Walter のお姉様のご自宅に家族で招かれ二泊したことです。その時、有名な聖トーマス教会合唱団 (トマーナー) の歌声を聴く機会があり、彼の音楽への造詣の深さを知りまし

た。彼は音楽は生活の一部であると言っていました。

1992年の3月に今度はWalterが徳島大学に来、約1カ月滞在しました。その間Ebbinghaus錯視の実験をし、その成果は1995年に共著論文として*Japanese Psychological Research*, 37, 158-169に公刊されました。また3月下旬に鳥羽で開催された知覚コロキウムと一緒に参加したことも懐かしい思い出です。研究以外では、近くの田舎の温泉に二人で行ったり、我が家の家族と共に徳島の花見をしました。

2008年10月にWalterにも意見をもらった明るさ錯視の本が出版され、早速その日本語の本を彼に送りました。Walterは大変喜んでくれました。

## ドイツ心理学の伝道師

多屋 頼 典 (岡山大学)

Walterに最初に会ったのはブルガリアで開催されたECVP(1988年)においてであった。彼は赤と緑の豆球が次々に交互に点灯すると混色の黄の光がみえる、というデモをみせてくれた。後で彼をDortmund大学の研究所に訪ねた時、彼やCavonius先生が、White効果はドイツのMunkerが先に研究しているのでMunker-White効果と呼ぶべきである、という話をしていた。筆者は彼らと共同でこれについて*Perception*誌に投稿した(1995年)。これを契機に“Munker-White効果”の用語が学会に定着し、お二人に貢献できた。今はお二人ともなくなられてしまったが、あの時の光景は今も眼に浮かぶ。

Walterは一般にローカルな文化が好きで、ヨーロッパがキリスト教一色であることを必ずしも快く思っていない様子だった。早世された父君が日本を旅行したときの写真やおみやげを残しておられたせいか、日本には特に親密な感情を抱いているらしい。日本でGestalt心理学が栄えた一因に盛永四郎訳のMetzger『視覚の法則』があることを重視しており、この名著を古本屋で探し出して彼に送ったことがある。彼には「ドイツ

た。しばらくして中央大学の高島翠さんからこの本の書評を英文で書き*Gestalt Theory*に掲載しないかと、Walterから提案されたとのメールをもらいました。その提案を高島さんは受けてくださり、Walterとメールの遣り取りをして書き上げてくれました。2009年2月1日に高島さんからWalterの訃報を知らされました。突然の訃報を信じられませんでした。しかし大切な親友が逝ってしまったことを受け入れるしかありません。享年58歳でした。約30年にわたって続いたWalterとの親交は私にとってはかけがえのないものです。Walterの残した多くの功績は今後も日本・ドイツ・世界で生き続けることと思います。ご冥福をお祈りします。

心理学の伝道師」を感じることもあった。後で濱田氏と共同研究をするために徳島大学にやってこられたことがあったが、その際には筆者の勤めている岡山大学でも講演をして頂いた。彼はまた知覚コロキウムでも講演したので、日本ですっかり有名になった。

昨年はオランダでのECVPで発表しようと思いついてWalterに連絡し、Walterと多屋・大橋康宏の3人で発表したPulfrich効果(*Gestalt Theory*, 30, 79-88)の続編を発表することにした。発表直前の1週間ほどはDortmund大学を訪ねてデモ実験を彼にも観察してもらった。ところで彼はECVPで私たちとの共同研究以外に4件も発表する予定であった。あまりにも精神的なので圧倒された。ECVP終了後に更に他の学会でも「日本におけるGestalt心理学の受容」といったテーマで講演していた。

超多忙なWalterから、ある日奥様が教えている子ども達の「ピアノの発表会」に招待されたが、このときの奥様の手料理にイカ(烏賊)が登場した。ヨーロッパ人はこういうものを食しないと思っていたので驚いた。奥様はいつもご主人の健

康を十分に配慮しておられたが、イカも健康食品である。Walter は時折身体の不調を口にしてはいたが、精力的に活動しているので余り気にならなかった。帰国後、約束した原稿がなかなか書けず、ようやく今年になってから送ったところ、「身体の状態がよくないから少し時間がほしい」と連絡があった。「急ぐ必要はない、回復するまで待っている」と返信した。そして2月7日に突然野口明子様よりメールで Walter の訃報を知ら

され、驚いた。後で Spillmann 先生から、彼は数年来ずっと闘病生活に入っていた由を伺った。

今にして思えば彼は以前とは人格的に変化していた。とても人なつっこく、小生を含め周囲の方々への配慮が見事であり、同行した妻と一緒に「立派な方に出会えたものだ」と感心していた。ご自分の死期について感じておられたのかもしれない。ご冥福を祈る。

## “Because I like GESTALT”

椎 名 健 (文教大学)

2005年3月末、第38回知覚コロキウムが立命館大学のびわこ草津キャンパスで開催された。コロキウムには秋田宗平の紹介で北岡明佳が Walter をお呼びすることとなった。Walter の講演では高名なゲシュタルト心理学者の父親の功績を中心にお話をされた。また、コロキウムでの個別発表にも熱心に耳を傾けて、日本語で口頭発表した研究にも関わらず、いろいろとコメントを挟まれていた。実に神業であった。野口薫が日本語で発表したものについてもコメントをし、関連した研究があるので論文を送るからと、帰国後にその約束を果たしている。

懇親会の折りに突然 Walter は、北岡明佳に対して「日本のゲシュタルト心理学」について *Gestalt Theory* に書くように誘われた。北岡は引き受けはしたものの、同時に、自身もあまり面識がなかった野口薫を Walter に引き合わせた。その結果、野口・北岡で仕事を進めることとなる。これを契機に野口と北岡の緊密な縁が出来たという話も興味深い。

さらに、Walter の指導者としての力量が日本の若い研究者に向けられていく。まず、知覚コロキウムの場で、山口由衣は「明るさ知覚に及ぼす図と地の影響」について多屋頼典の仲介で Walter に報告した。すると、盛永四郎の等幅の要因を使用した図の作り方に注意を向け、その研究を褒めた。Walter が帰国すると何度か二人は往復メー

ルを交換し、Walter は山口に目を通すべきいくつかの論文を添付してきた。指導はこのように速やかで徹底していた。

吉野大輔は野口薫と共著で *Gestalt Theory* に論文を投稿していたが、音沙汰がないので、催促のメールを出したところ、編集者と Walter から丁寧な詫言状が届いた。そればかりでなく Walter は、論文は興味深いので修正の過程に協力することも明言していた。論文が印刷にまわった後に、吉野は前々から聞いてみたかった事を思い切って尋ねてみた。「一度も会ったこともない外国人である私に、どうしてこれほどまでに親身になってくれるのか」ということであった。その質問に対して彼は、シンプルにこう答えた。“There is an EASY ANSWER to your question: Because I like GESTALT.” と。続けて2005年3月に野口薫とお会いになった時のエピソードと日本のゲシュタルト心理学者として大山正に対する尊敬の念が綴られていた。そして「君もこの魅力的な領域で研究を続けなさい」と書かれており、師の野口薫を失い、失意の中にあった吉野は大いに元気づけられたという。

Walter を偲ぶとき、日本の若手研究者との交流は他にもいろいろ特記されよう。高島翠も同様な体験をもつ。野口薫編の『美と感性の心理学——ゲシュタルト知覚の新しい地平——』が出版された折、北岡明佳経由で Walter にもその

本が届いた。すると、その書評が *Gestalt Theory* に載ることとなった。また、ヨーロッパでこの本の紹介を広くしていたようで、Gestalt Theory 関係の学会で Basic Book に選ばれた (2008 年秋)。書評の下書きのチェックを高島が依頼されたときに、Walter の原稿に「野口薫の死後、高島翠・和田有史・増田知尋によってこの本が仕上げられた」と書かれていたので、「和田の名を前に出して欲しい。先輩なので」と頼むと、「ヨーロッパはレディファーストの世界ですよ」と Walter は受け入れなかった。

Walter Ehrenstein の人となりとして、自分の立ち位置がしっかりしていたことは印象深い。たとえば、微細な神経科学に対しては心理学とは関係ないと 25 年間一貫して攻撃的であった。彼自身は Neuroscience とゲシュタルト心理学の関連には深い見識を持って、Spillmann と共著でその理論的な論文もある。しかし、細かすぎるサイエンスは嫌っていたのだ。心理学的な問題には極めてナイーブで、問題点を感じるとすぐに噛みついてくる。しかし、正しく説明ができると飲み込みが良く、納得することも速い。実に研究心が旺盛であった。日本の知覚心理学についてはかなりの目配りをしており、ゲシュタルト心理学の臭いを感じ取れる研究には敏感で、実際、日本の知覚研究にそのような感じを得ることが多かったのではないかと思われる。また、盛永四郎については特別の尊敬を払っていた。盛永四郎の生誕 100 年の記、“Remembering Shiro Morinaga” を *Gestalt Theory*, 30, No. 1 に椎名・大山が書く機会を作ってくれたことには、特別の感謝を申し上げなければならない。そして、日本の若手の研究者に深い愛情を注いでいてくれたことを感じる。Walter に厚誼を得た若い研究者たちは、その指導力と慈愛を感じることができた。知覚心理学、ゲシュタルト心理学を中心とした知覚研究に対する Walter の真摯な姿勢だけでなく、教育者、

スーパーバイザーとしての包容力、指導力も並のものではなかった。そのことを説明するために具体的な例を挙げるまでもなく、ドイツから遠く離れた日本という国にも、彼の死を心から悼んでいる多数の人が存在することが雄弁に事を物語っている。

Walter Ehrenstein と私の出会いは、Walter によれば、1979 年に私が Konstanz 大学を再訪した折からであるが、どなたかのメールに次のように書かれている。I wanted to contact Ken Shiina, whom I know since 1979 (!), when he was in Germany, we called him amusingly “Ken Japan”—instead of Shiina—which is pronounced like “China” in the German tongue. ……しかし、もっと特別な出会いは 1981 年 4 月 16 日、Robert Freeman と一緒に東ベルリンで開催されたドイツ心理学会に参加した折りに、帰路は同行できなくなった Freeman が、私のコンスタンツまでの帰路の同行を Walter に依頼してくれたことにあった。ちょうど車で大会に参加していて、コンスタンツまで帰るという Walter を引き合わせてくれたのであった。Walter は一見、神経質そうな風貌であったが、私を車に同乗させてくれることを快諾してくれた。Walter は Freiburg 大学に Konstanz 大学から異動したばかりで、まだコンスタンツに私物を残していたのであった。ベルリンからコンスタンツまではかなりの道のりである。休憩時間を含めて、長い時間、お互いのことについて、心理学について、あるいは、共通の知人について等いろいろと歓談ができた。途中、Walter はある駅でゴルフフレンドをピックアップして、そこから 3 名の一層楽しい同行となった。

Walter Ehrenstein, 享年 58 歳。学者として、まだ若く、早すぎる死であった。何よりも日本の知覚研究にかけがえのない人を失ってしまったことを無念に思う。心からのご冥福を祈る。